

# 雨の異境にて

---

好事に魔あり

Wakatsuki Fusako

若月房子

青山ライフ出版

もくじ

プロローグ

- |   |                    |    |
|---|--------------------|----|
| 1 | スペイン旅行再び           | 8  |
| 2 | お一人さまの本音           | 14 |
| 3 | されどパスポート事情         | 18 |
| 4 | 二度目のスペイン、初めてのバルセロナ | 22 |
| 5 | 追憶の中の都市            | 26 |
| 6 | グエル公園へ来た小学生        | 30 |
| 7 | 華麗、独創の建築物に陶然……     | 34 |
| 8 | 暗転した観光             | 39 |
| 9 | 母と娘の感情             | 45 |

10	異境でたったひとり	52
11	われ関せず？ スペインの警察署	56
12	日本総領事館での反省と安堵	61
13	窮余の電話、深夜の日本へ	65
14	ホテル「バルセロ・サンツ」	70
15	雨降る市街 <small>まち</small> と旅情	75
16	パスポートがあった！	81
17	不要になったファクス送信に感謝	90
18	国内飛行でグラナダへ	98
19	回想のアルハンブラ	106
20	この祖母にして……	114
	エピソード	123

## プロローグ

旅に出ると、老人の物忘れと同様の、後になってみれば大笑いするような錯覚をしてしまうことがよくある。日常と違った空間に身を置くと、脳の働き方がそれに伴っていなくなるのだろうか。

去る年の秋、女性四人、男性二人の高齢者グループ六人で、私は、三日間の東北旅行をした。(あの3・11大震災が起こる一年半前、行き先は、被災地とは反対の日本海側だった。)

男鹿半島と白神山地を巡り、旅の一番のお目当てである人気の五能線に乗った。でこぼこした海岸線を走る車窓にひろがる海の中に、人間で言えば赤ちゃんみたいな小さな岩がたくさん散らばっていて、そこに白い波しぶきがぶつかっては跳ね返るのを、年甲斐もなく皆で歓声を上げながら眺めたのち、二泊めの青森の温泉宿に着いた。

ここは、かつて、小柄な体躯で奇想天外な妙技を見せてはファンを沸かせた、男雛おとしびなのような顔をした幕内力士の出身地である。

宿は、広い中庭の四方を一階建ての建物がぐるりと取り囲むような格好で、客室や浴室、

食堂その他へ回廊で行き来できるような造りになっていた。

「何だか、スペインのパティオみたいね」

「パティオにしては広いわ。マドリードのマヨール広場を小さくしてみたみたい」

一行の間で、こんな会話が弾んだのは、私たちがスペイン語を学習する仲間であり、四年前に、実際にスペイン旅行に行ってきたからだ。

翌朝、着替えを済ませて、手荷物の整理をしていたときである。私の隣の部屋で泊まっていた赤羽さんという奥さんが、なにやら騒ぎながら廊下に飛び出してきた。何事だろうと、それぞれ彼女の両側の部屋で泊まった私たち女性二人と男性二人も呼び出されて廊下に出た。(グループの中に夫婦のペアは無かった。)

赤羽さんは、

「財布や運転免許証や印鑑などを入れておいた、一番大事なセカンドバッグが見当たらないわ。なくなってしまったわ。どうしよう」

と血相を変えて私たちに訴えた。

彼女と同居の田村さんは、朝風呂に入浴中で、その場にはいなかった。

男性の内藤さんが、

「金庫の中へ仕舞つてあるんじゃない？」

と言った。その途端、赤羽さんは、

「あつ、そうか。そうだったんだわ」

と、記憶をよみがえらせて、ほつとした表情で胸をなでおろし、笑いながら、また部屋の中へ引つ込んだ。

何のことはない、衣服をハンガーで収納するロッカーの下段に設置してあるキー付きの貴重品入れの金庫の中に、前夜、セカンドバッグをきちんと仕舞つておいたのをうっかり忘れていたのである。

赤羽さんは、東京と長野に住居があり、国内のみでなく、海外の名だたる地へも、あちこち行つてきた旅慣れた人である。

そのあと、食堂での朝食のとき、助言した七十代の内藤さんが、自分にもかつて旅先で同じようなことがあつた、と、赤羽さんを慰めるように、私たちに話してくれた。彼が定年退職後に旅行したオーストラリアでのこと、バスで観光スポット巡りをしている最中にカメラをどこかへ置き忘れてしまったので、添乗員と運転手をお願いして、ツアー一行が立ち寄つたみやげ物店など何ヶ所かへもう一度バスに戻ってもらい、ぐるぐる回つて見てあるいたが

見つからなかった、よくよく見直したら、バスの中の自分の座席の下にカメラがころがり落ちていた……と。

たとえ数日間といえども、旅行に出かけて寝食すると、こんな喜劇が大真面目で展開しかねない。どういうわけか、平常の記憶力、判断力が鈍磨してあわててしまうのだ。

他人事ひとことを書いてる私自身、旅先でミステークをしでかした。それは、笑いながらお茶のみ話として語るには、時間的空間的にケタ違いに大掛かりなものであった。

私の体験は、この東北旅行の半年前に遡さかのぼる。スペイン第二の都市バルセロナを訪れて遭遇した災難が、二転三転して思わぬ顛末てんまつに行きつくことになった。その記憶は、何年経っても不快な思いが甦よみがえってくるのに、なぜか、又、時が経つほどに、甘美な思い出となつてほのぼのとした気持ちもしてくるのが不思議である。「災い転じて……」と言うが、何事も無く、ただ通りいっぺんの「見て歩き」の観光旅行をしてきたものでは得られなかったであろう充足感が、私の中に今も残っている。それは、例えてみれば、お汁粉の中の一つまみの塩が入って甘味が利いたような感じ、とでも言えるだろうか。

一篇のフィクションにも相当するかも知れない稀有なこの体験記は、日本から遠く離れた、憤りと懐かしさが入り混じる華やかな異国の都市への私の恋歌でもある。

## 1 ス페인旅行再び

国土交通省観光庁の「観光白書」によると、近年の日本から海外へ出国した人の数は、二〇〇九年に一、五四四万六千人、二〇一〇年に一、六六三万七千人、未曾有と言われた「東日本大震災」が起きた二〇一一年には、一、六九九万四千人であった。翌二〇一二年には一挙に一五〇万人が増えて、一、八四九万人と突出し、二〇一三年には二〇〇万人以上減って、一、七四七万人という統計になっている。こういう数字の推移は、行く先の国の政情や円高・円安の動向による旅行費用が影響すると見られている。

この中で、公用やビジネスに関係なく、物見遊山の旅行者の数がどれくらい占めているかは、正確には計り知れない。けれども、海外で起こるテロや、諸々の不穏な事件、事故、あるいは流行病などの世情不安を恐れつつ、はたまた、国難というほどの世紀的な天災・人災が国内で起こっても、毎年、全日本人の十三〜十四パーセント内外の人は、何らかの目的を持って外国へ出掛けていることがわかる。

その一割強の海外渡航者として、すでに前期高齢者と呼ばれる年代に属する者が、アラ



フォーこと四十代の娘と、高校入学が決まった十五歳の孫娘、小学六年の始業式をひかえた十一歳の孫息子との四人で、春休みを利用して八日間のスペイン旅行をする、と聞いたら、「なんて元気で羨ましい」と思う人もあるだろうか。

外国旅行は、私にとって五度目である。

金もない、何もない私のような者が、月並みなツアー参加がほとんどだとはいえ、こんなことが出来たのは、ただただ飽くなき好奇心と、六十歳代の終りに近いそのときまで、お産以外の入院生活といえ、三十代のときに虫垂炎で一週間経験しただけ、というたぐいまれな健康体のゆえであったからだろう。

私は、昭和から平成に元号が変わって四年目に五十一歳で夫を亡くし、以来、長野で一人暮らしをしている。私の一人だけの子供である娘の佳子よしこは、一女一男を育てる平均的な家庭の主婦として、東京に在住している。

その佳子から、

「また、スペインへ行く気ある？」

と電話がかかってきたのは、二〇〇九年の春、三月の十日を過ぎてからだった。

（ちなみに、この年は、どういう影響があつたのか、二〇一三年から過去十年間で、海外旅行者数が、最も少なかった）。

「スペインへ？ もう一度？」

まるで予想もしない唐突な問いだったので、私は訊き返した。

都区内の公的機関の職場で、パートの時間帯で仕事をしている佳子は、

「月末からなら休みがとれるのよ。美緒も高校入学が決まったことだし、子供たちに、できるだけ若いうちに外国を見せてやりたいと思っているの。パパは仕事で行けないから、お母さんを誘って四人で行ってくれば？ と駿さんも言ってくれているから」

と言った。地理的に離れて一人で暮らしている私への、娘夫婦の気遣いがそれとなく伝わってくる。

娘と孫たちは、他の外国でなくスペインへ行きたいらしい。そういえば、孫息子の祐太は、小学生ながらサッカーチームに加入している。「リアル・マドリードのジダン選手っていいな」と言っているのを、何度か聞いたことがある。だから、スペインへ行こう、と決めたのだから、うか。